

第41回日本ジオパーク委員会 現地調査結果一覧

ジオパーク名	概要	過去の審査の主な指摘事項(該当あれば)	今回の調査結果		今回の調査結果
			主な評価点	改善を求める点	
立山黒部 1/19①	民間団体が運営する強みを生かした運営が行われつつある。一方で、行政主導のジオパークでは比較的容易にできることがなかなかできない面もある。条件付き再認定の際の課題であった、関係者のジオパークに関する共通認識の醸成、事務局体制の強化、自然・文化遺産の保全のあり方の再検討などが大きく進展した。これら課題解決に向けた活動の結果、ジオパーク事務局のコーディネータ機能が強化され、地域の様々な主体の協働が以前より盛んとなっている。例えば、ジオパーク内の学芸員との連携の強化、保全部会によるジオサイトカルテの完成、多くの関係者の参加によるガイドブックの完成、旅行代理店と連携したガイドツアーや山岳ガイドが案内する山岳ジオツアーの開始などである。学校教育へのさらなる浸透と可視性の強化が今後の課題である。	1. 関係者のジオパークプログラムに対する共通理解 2. 事務局体制の強化 3. 自然・文化遺産の保全のあり方の再検討 4. 既存の観光資源のジオツーリズムへの活用促進 5. 情報発信の改善とビジビリティの向上 6. ネットワーク活動への積極的な参画 7. 地域コミュニティや地域住民を巻き込んだ活動の促進 8. あらゆるレベルでの取組の共有と連携の強化 9. サイトや拠点施設における看板類の設置の促進 10. 身近な「なぜ」から地域を語る取組 11. 学校教育・社会教育事業の中におけるジオパーク教育の促進 12. 防災や気候変動に関する情報発信	事務局体制が強化されコーディネータ機能が良くなった。課題であった専門員の増員が実現すると共に、ジオパーク内の博物館の学芸員とジオパークとの連携が強まっている。保全に関しては、ジオパーク内のサイトの関係者が多数参画する保全部会が立ち上がり、すでにジオサイトカルテが完成した。JTBを通じたガイドツアー、山岳ガイドとの連携による山岳地域のジオツアー、富山市・富山大学との連携による「ブラ富山」などが行われた。会員企業とジオパーク協会の協力で、地元の梨のブランド化もはじまっている。黒部市周辺のレストランやカフェで開催されているジオカフェは、ジオパークを浸透させる上で重要な取り組みである。ジオパーク・住民・科学者の連携を生かして、読んで面白いガイドブック「歩いて手繰る立山黒部ジオパーク」が完成したことは特筆すべきである。	1. 保全計画の完成 2. 教育用ジオサイトの新設 3. 顧客ニーズに対応できるガイドのスキルアップ 4. 優れた活動のJGN内での共有 5. 防災士会と連動した防災・減災活動の強化 6. 自治体・国の機関・鉄道会社等と協力した可視性の強化 7. サイト管理者との連携による野外説明板の更新 8. 企業・市民と連携したSDG'sへの取組み	○
南アルプス (中央構造線エリア) 1/19②	赤石山脈(南アルプス)の長野県側に位置し、富士見町、伊那市、大鹿村、飯田市の4市町村で構成されている。エリアはユネスコエコパークと重複しており、山岳地帯は南アルプス国立公園に指定されている。地質的には、白亜紀後期のアジア大陸内部の火山フロント付近に生じた中央構造線を境に、日本列島の土台である付加体がそのまま分布する外帯と、付加体に貫入した花崗岩が分布する内帯の岩石を比較して見ることが出来る。またエリアは糸魚川-静岡構造線や赤石構造線や南海トラフに囲まれており、赤石山脈の形成過程の重要な要素となっている。現在に至る最近100万年間の隆起速度は大きく、この隆起に伴って河川が断層などの弱線部を下刻し、尾根との間に大きな標高差を持つ深いV字谷が発達している。この中央構造線に沿った谷には、古くから人が住み、外界に隔てられた特異な文化を育んできた。一方で、海と山を結ぶ街道が形成され人と文化の往来も盛んであった。	1. 事務局の運営体制の強化 4市町村の運営活動がそれぞれの担当エリアにとどまらず、基本計画から事業計画まで展開してジオパークとしての活動の一体化を図ってほしい。 2. ジオサイトの保全 一部の露頭では落石等の危険に対する対策と保全の仕方の検討をしてほしい。 3. ジオガイドと連携したジオツーリズムの強化 エリア全体のジオストーリーを語るガイド養成 4. 解説板の統一作成 市町村それぞれが作成しているものを統一したガイドラインのもと整備してほしい。 5. 国際対応 パンフレットや解説板の多言語化を進めてほしい。 6. 拠点文化施設でのジオパーク情報発信の充実 ジオパークに関する学習やネットワーク活動の紹介など。 7. 南アルプスのテーマと周辺地域とのネットワーク構築を進めてほしい。	1.一部の地域において、地域住民が主体となったジオパーク的な取り組みがある。 2.一部の地域において、産出した化石について、産出地を保全し、産出した化石を地元保存・蓄積するという地道な活動をしていることは評価できる。 3.教育における活用は、一部の学校に限られるものの継続的な取り組みがなされて成果ができてきている。特に、高遠高校の他の日本ジオパークを生徒らがインターネットを活用して調べ、壁新聞を作成したことは高く評価できる。	1. 前回の再認定審査で指摘した事項について、この4年間でほとんど改善の動きが見られなかった。 ①構成4市町村の担当者や関係者で指摘事項の見直しと、ジオパークの理念や南アルプスジオパークのコンセプトの共有 ②ジオサイト、自然サイト、文化サイト、ビュースポットなどのサイトの整理とデータベース化 ③伊那市の担当者のみで運営している事務局体制の改善と他市町村との日常的なコミュニケーションの推進 ④ジオパークとエコパークのそれぞれの特質を生かした活動 ⑤中・長期的な計画・各指針に基づく具体的な活動展開 ⑥分杭峠におけるゼロ磁場観光とのすみ分けとジオサイトとしての価値の再検討 ⑦ジオパークの拠点施設の展示や案内のさらなる充実と看板の説明内容の改善 ⑧変動の激しい地域の土砂災害や河川防災に関する教育活動の推進 ⑨南アルプス全体を説明できるジオガイドの養成	△
鳥海山・飛島 1/19③	山形県・秋田県にまたがる活火山「鳥海山」と、鳥海山の西方約30kmにある「不思議の島 飛島」を含むジオパーク。「日本海と大地がつくる水と命の循環」をテーマに、鳥海山の溶岩と岩なだれによって作り出された景観や日本海と鳥海山が生み出す水の恵みを感じられるほか、飛島の大地の歴史と文化を楽しめる「海」と「山」、「島」のジオパークです。	1. 丸池様(サイト)の実質的な保全対策。 2. 協議会の各部会の活動を協議会内部で情報共有 3. 4市町内の担当課と協議会事務局との連携を綿密に。 4. 飛島や八幡地区のような取り組みをもっと拡大し活動の担い手を増やしていく。 5. 山形県、秋田県との連携、実質的な支援。 6. ガイドが活躍する場の創出とジオツーリズムの構築。 7. 教員が学校で実施する教育プログラムの構築。教育現場で活躍できるガイドを増やす 8. 景観保全の拡充、持続可能な景観の保全対策	・協議会事務局、首長、担当部局、ガイド、住民各層の連携やコミュニケーションが良く、課題の認識も的確で、円滑に活発な活動が行えるよう仕組みづくりも工夫されている。 ・保全では、人の立ち入りを制限するだけでなく、人の流れをセンサーで測定し、データに基づく「保全と活用」を進めようとしている。また、構成自治体では、環境保全条例にもとづき、領域内の岩石採取を規制しており、環境保全に積極的である。 ・秋田県や東北地区のジオパーク活動を牽引し、数々のフォーラムや研究会を開催するなどネットワーク活動にも積極的である。	・火山だけでなく、地震や地殻変動に関する地形・地質調査と保全を進めること。特に象潟、(九十九島)では、県営圃場整備事業の着手前に、トレンチ調査を含む学術調査を行えるようにしてほしい ・協議会と防災・危機管理部局や関連機関と日常的な情報共有、連携を更に進めてほしい ・地理、地学など地球科学を専門とする専門員、職員を採用すること	○
白滝 1/19④	地球全体が寒く、食料となる動物たちを追ってくらしていた時代、私たちの祖先の暮らしを支えたのは狩りの道具、石器である。その素材には、割っただけで鋭い刃物になる黒曜石が選ばれていた。マグマが急速に冷え固まることでガラスとなったこの岩石が、大雪山や十勝岳へと続く、火山活動の始まる場所で誕生した。白滝ジオパークは国内最大規模の黒曜石産地であり、白滝、丸瀬布、遠軽、生田原の各地域で黒曜石が産出するのが特徴である。流紋岩質マグマの噴火過程とそれに伴う黒曜石の生成過程、さらには旧石器時代から続く人類の黒曜石資源利用の変遷までを感じることが出来るジオパークである。	・全町的なジオパークの可視性向上 ・全町的なジオパーク活動の実施 ・活動をサポートする人材の育成 ・地区やジオサイトを横断するストーリーの構築と活用 ・地域の持続的発展のためのジオ関連商品の開発や再発見	・複数の協力団体がジオパーク活動に積極的に関わっている ・協力団体との連携が強化されたことにより拠点施設の運営が円滑化された ・町長との対話、サイトの保全、協力者の勧誘、学校教育、レジャーガイドなどが出来る強力なステークホルダーの存在 ・指摘事項を受け入れて改善のために取り組む意識がある	・事務局体制の改善 ・可視性の向上 ・研修や学習機会の創出 ・サイトの再整理 ・ジオガイドの養成 ・専門性の高い情報の質の担保	△

ジオパーク名	概要	過去の審査の主な指摘事項(該当あれば)	今回の調査結果		今回の調査結果
			主な評価点	改善を求める点	
箱根 1/19⑤	箱根ジオパークは伊豆・小笠原弧が本州弧に衝突するプレート境界域に位置し、その中心に位置する箱根火山が南北に伸びる天然の障壁をなしている。箱根火山は首都圏に最も近いカルデラを持っており、現在も活発な活動を続ける活火山である。豊富に産出する火山岩は古くから石材として用いられ、この地域の文化の一部を形成してきた。このような地質遺産や文化遺産に加えて、泉質豊かな温泉などの火山の恵みも堪能できるジオパークである。	<ul style="list-style-type: none"> ・ジオパーク全体に共通するジオストーリー ・ジオパーク全体を語るができるガイドの育成 ・箱根ジオパークガイドとしての統一感を保つ仕組みづくり ・具体的な行動計画の策定 ・推進協議会の意思決定プロセスの可視化 ・事務局体制の改善 ・組織的かつ全域的な教育活動 ・普及活動の向上 	<ul style="list-style-type: none"> ・全域的な教育活動の充実 ・活発な研究活動と地域への還元 ・多様な人材による活発な活動 ・文化財とジオパークのつながり ・広域での運営体制における工夫 ・国立公園との連携 ・火山防災における取り組み 	<ul style="list-style-type: none"> ・箱根ジオパーク全体のビジョンの欠如 ・事務局体制の改善 ・サイトの分類とサイト保全計画の策定 ・箱根ジオパークのテーマの分かりにくさ ・拠点施設や駅等におけるジオパークの可視性 ・地域全体を意識したガイドの育成 ・地域住民の参画とパートナーシップ ・自然遺産や人々の暮らし、産業と地球の営みのつながり ・関東地震の災害遺構のサイト指定や情報発信 ・ネットワーク活動のさらなる活性化 	△
ゆざわ 1/21①	現在も続く地熱に伴う諸現象がみられるサイトや過去の火山活動に伴う院内石や院内銀山、カルデラ内に堆積した堆積岩や化石など、地球の火成活動を知ることができるジオサイトが複数ある。また、山地と平野両方の要素をもち、大規模地すべりに関連した地形や山岳部のV字谷、活断層に沿った断層三角末端面や扇状地、平野部の河岸段丘などがジオサイトに指定されている。人々は地熱やそれに関連したサイトを湯治や観光、地熱を利用した農産物の加工販売などに利用し、現在では地熱発電としても利用している。また、断層に沿った扇状地では、その地質学的特徴を生かしセリやサクラランボが栽培され、地域の特産品となっている。	<ol style="list-style-type: none"> a. ジオサイトという名称と、それが示す範囲の整理 b. 379 か所のジオポイントとジオサイトについての概念の整理 c. 個別のジオポイントの関連性を科学的に表現するジオストーリーの構築 d. 大局的な説明が不足 e. 幅広い分野の専門員の雇用を増やすなど、事務局体制のさらなる強化 f. 秋田県内のジオパークとの連携、秋田県との協力体制 g. 市の予算以外の財源を確保 h. 地球科学的価値が明確でないジオポイントの整理 i. 研究支援制度 j. ジオパークを防災活動に活用する取組がほとんど行われていない k. ジオパーク関連施設が一見してそれとわかりにくい l. 展示・看板などの図や写真を用いた内容充実 m. パンフレットの内容整理 n. 採算がとれガイド活動の持続性にもつながるジオツアー造成 o. 外国語のウェブサイトが作られていない p. 地熱を利用した地域経済活動を発展させる体制 q. 若手の認定ガイド雇用を創出 r. ユネスコ世界ジオパークへの認定に向けた活動 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 運営体制の強化:2名の専門員と旅行業資格を取得した地域おこし協力隊員の採用 2. 教育活動:全年齢を対象とした教育活動を展開し、小学生公認ジオガイド(現在は中学生)誕生 3. ジオサイトの整理と保全リストによる管理:すべてのジオサイトのモニタリング調査と保全リストを作成、“地熱のまち”表示 4. ボトムアップ活動:地域コミュニティに自主性を持たせたボトムアップ型の運営体制 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 文化サイトや生物サイトがジオサイトに含まれており、きちんとその科学的価値を分ける 2. ジオサイトに含まれていないエリア内の地球科学的価値や生物・文化などとの関連性の研究 3. 「地熱のまち“ゆざわ”」の看板(横断幕やのぼりでも良い)を増やす 4. さらに多くの利害関係者と効果的なパートナーシップ戦略を打ち出す 5. 地熱を大きなテーマとしているアイスランドレイキャネスUGGpとの提携 6. 博物館機能を持つ拠点施設(ジオスタ☆ゆざわ)の視認性向上 	○
伊豆大島 1/21②	伊豆大島はフィリピン海プレート東縁の火山フロントに位置し、主に玄武岩からなる現在も活動的な第四紀火山である。火山の島ならではの躍動感のあるサイトに恵まれ、そうした環境に適応してきた独自性に富む動植物や、人々の歴史や文化を楽しむことができる。島の玄関口となる施設などへのデジタルサイネージ設置や、ジオステーションおきた港の新設など情報提供や可視性が向上した。個々の商品の認定ではなく地元の伝統をストーリー化し、カテゴリごとに認定するジオパークブランド認定制度も立ち上げられた。学校教育へのジオパークの取り込み、関係機関と協力した防災教育など他地域でも参考となる取り組みも多い。事務局が独立した係に昇格し、企画運営部会の構成が変更されるなど体制の強化が進んだ。特に行政内でのジオパークの位置づけが明確になり、ジオパークがまちづくりの中に位置付けられるようになった。実施される事業の幅の広がりに伴い、ジオパークの新たな担い手や理解者が増えつつある。	<ol style="list-style-type: none"> 1. 事務局体制の強化 2. 導線を意識した情報提供 3. 日本ジオパークネットワーク活動への積極的な参画 4. 類似する解説板の整備を含めた看板等の整備および内容の見直し 5. ガイドマップ・ガイドブック等による情報入手手段の拡充 6. Web ページ等の多言語化およびインバウンド対応 7. 拠点施設の整備 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 事務局がジオパーク推進係として独立しスタッフも増員。企画運営部会を4部会から6部会に再編し体制を強化。 2. 島の玄関口となる施設へのデジタルサイネージや、ジオステーションおきた港新設など可視性、情報提供を改善。 3. 様々な看板の混在についてガイドラインの策定と看板整備連絡会開催を通じ統一基準での設置の基盤を整えた。 5. ガイドブックとルートマップが改訂され英語版を製作するなど多言語化への対応も進められた。8つの拠点施設の整備が進められている。 6. 地元の伝統をストーリー化しカテゴリごとに認定する新たな認定ブランドとそのサポート制度がはじまった。 7. 学校教育へのジオパークの取り込み、関係機関と協力した防災教育など他地域でも参考となる取り組みが多い。 8. 認定ガイドの増加など活動を担う人材の育成も進んでいる。プロガイド部会の設立や上級資格の設置模索などプロガイドの活動先進地域として見本になる動きも認められた。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 火山博物館の改修の具体化。8つの拠点施設の安定的な運営。 2. 管理運営組織のさらなる人員拡充 3. 保全に関わるサイトごとの個別計画の策定。 4. 海域のサイトを取り入れた境界線の再検討 5. 東海汽船船内での可視性の強化 6. ガイドブックの刊行など情報提供の強化、教育旅行の誘致 7. 文化遺産の保全・活用の推進 8. 教育活動の継続性の確保、教育プログラムの島外への発信 9. ジオガイドの人材育成と活躍の場の創出 10. ネットワークでの発信と貢献の推進 11. 防災にかかわるプログラムの他地域への発信と来島者誘致 	○

ジオパーク名	概要	過去の審査の主な指摘事項(該当あれば)	今回の調査結果		今回の調査結果
			主な評価点	改善を求める点	
銚子 1/21③	銚子半島では隆起・堆積・侵食の現象によって地形が形成される様子を目撃でき、日本列島の激しい地殻変動と侵食現象を象徴する地域である。銚子半島には、約12万年前までに海底に堆積していた砂や泥が急激に隆起した下総台地が分布する。この台地は、三方を太平洋に囲まれ、風波による激しい侵食を被った。特に屏風ヶ浦の急崖は、風波によって後退を続けて形成されたもので、現在では遅滞しているものの、年間50cm～100cmもの速度で急速に侵食が進行していた。この他、犬吠埼や利根川河口など銚子半島の東部では、白亜紀や古第三紀の堆積岩や火成岩が見られるなど、半島形成にとって欠かせない岩石が確認できることが特徴である。	<ul style="list-style-type: none"> 半島の成り立ちや特徴が銚子の暮らしや文化に深く関連していることを意識したジオストーリーの構築が必要。 観光面でジオパークを活用しきれていない。やや内向きの活動となっている。 来訪者がジオパークを認識できるような掲示が不十分。 屏風ヶ浦の保全について、どう考えていくのか、普及啓発を行っているか。 ジオパーク展示室のある青少年文化会館自体の老朽化への対応。展示の更新について。 	<ul style="list-style-type: none"> 市民の会などの市民が関わり、推進協議会の各委員会等が実施されており、ボトムアップによるジオパーク運営がなされていること。 学校やイベントなどで実施される様々な年代に合わせて準備された環境教育は銚子ジオパークの特徴。 市内全ての小学6年生を対象に岩石や化石を触って観察して、地形形成の歴史や災害を学ぶプログラムがある。防災学習や関係する文化財にも関心を広げる窓口としても機能。「こどもエコツアー」、「銚子ジオ散歩」「親子で夏の自由研究ツアー」など学校外でもジオパークに触れられる機会が創出されている。 ジオパークの活動に共感して参画する民間企業や市民が増えている。地元のハーブ園とビール製造業者が開発した炭酸飲料「銚子灯台コーラ」の売り上げの1%を当ジオパークの活動推進のために寄付されるようになる。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 訪問者がジオストーリーを意識できる仕掛けを構築すること。 2. 事務局員の増員や協議会での業務連携分担等。 3. ジオサイトカルテとジオパークエリア全体の保全計画策定。海域へのエリア拡大について検討。 4. 観光拠点の展示をジオストーリーと一般観光客ニーズを踏まえ更新。 5. 市民や企業とのパートナーシップを制度化。 6. ジオパークは経済と観光振興にさらに貢献するような仕組み作り。 7. 「銚子ジオパークミュージアム」の展示更新、誘導集客検討。 8. 気候変動について紹介するプログラムを開発。風力発電による地球環境への影響や、実際に景観や屏風ヶ浦の地球科学的な価値に対しての影響などを踏まえ、協議会としての考えを整理。ジオツアーや環境教育の中にも取り込んで欲しい。 	○
下北 1/21④	約2億年前の付加体成長から、日本海の拡大、島弧火山活動、さらには、氷河時代から現在までを通して、ストーリー性に富んだ地球の変動の魅力を体感できる地域である。本州最北東端にあって、津軽海峡の複雑な海底地形、沖合での海流の衝突など、地形と気象環境が織りなす特殊条件が、多様な生態系を生み出し、このジオパークの魅力を引き出している。古くから信仰や温泉文化、残るアイヌ文化の影響、さらには海洋関係の施設設置など、この地に暮らす人々が、長年、地形・地質の恵みを楽しみながら栄えてきた。海と生きる「まさかり」の大地と名打った下北ジオパークは、推進計画に基づいた活動を行い、高い可視性を示すようになっている。ほとんどの学校でジオパーク教育が実施され、生徒が自発的にPR活動や学習成果発表をしている。環境問題を意識させるツアー、積極的なジオフードメニュー開発なども実施。	<ol style="list-style-type: none"> 1. 下北ジオパークとしての事業計画の立案 2. 地域全体のストーリーの中における各ジオサイトの位置づけ 3. 地形地質に関する知識理解の向上 4. 認定ジオパークガイドの活躍の場の創出とガイド間の情報共有の仕組みづくり 5. ジオパークを活用した教育活動の拡充 6. ゲートウェイとしての拠点施設の整備と展示の充実 7. 防災に対する下北ジオパークの貢献 8. みんなでジオサイトを保全する仕組みづくり 9. 国際対応の必要性 	<p>概ね指摘事項には対応ができています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 約90%の小中学校でジオパーク学習を導入し、学習活動発表会、修学旅行先でのPR活動などを実施。 2. 認定ガイドによる、地域の成り立ちと自然保全や環境問題を結びつけたツーリズムが行われている。 3. ジオパークの推進計画が整備され、全サイトカルテやモニタリングマニュアルが作成され地域コミュニティが保全活動に参加している。 4. メディア紹介、様々な企画で取り上げられ高い可視性を示している。 5. 推進協議会の事務局員を、ここ数年間、JGNへ研修派遣し続けているなどネットワーク活動に大きく貢献している。 6. 地域の作物と地質地形とのかかわりがよく表現されており、ジオパークのブランド化が根付いている。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 観光客の導線を考えた看板やHPの整備。 2. 自然や文化遺産との関連を意識した解説。 3. 既存のツーリズムの活用と、ガイド説明の改良。 4. 仏ヶ浦や恐山宇曽利山湖周辺の科学的価値の検討 5. 沿岸を含めた領域の再設定 6. 台地の発達史などがわかりやすい解説版の改良。 7. パートナーとの協定締結と農漁業関係組織の取り込み。 8. 教育活動など下北モデルの共有。 9. 構成市町村の密な連携 	○
浅間山北麓 1/21⑤	新第三系の基盤の上に日本有数の活火山である浅間火山がそびえる。数万年前から続く黒斑、仏岩といった火山の活動の後、約1万年前から前掛火山の活動が始まった。前掛火山は4世紀頃、西暦1108年、1783年などに大規模な噴火を起こし、特に1783年の天明噴火は軽石噴出に加えて火砕流、溶岩流、岩屑なだれが発生し、山麓地域で壊滅的な被害が生じた。また、川に流れ込んだ火砕物が大規模泥流となり、関東一円に被害をもたらした。この噴火については豊富な古記録や遺構・伝承がある。特に、噴火で大きな被害が出た鎌原村の観音堂で、200年以上にわたってこの災害を伝え続けている「おこもりさん」の存在は特筆できる。また浅間火山の北麓の火山扇状地の上には黒色土壌が発達している。これを利用して栽培されたキャベツやニンジンが、地域の特産品となっている。	<ul style="list-style-type: none"> ○早急に解決すべき課題(おおむね1～2年) ・サブテーマのネガティブな印象について→○ ・ガイド育成とジオストーリーの構築→○ ・運営組織の名称(浅間山ジオパーク協議会)について→○ ○解決すべき課題(3～4年先を視野に) ・ジオサイトの保全について→○ ・科学的価値の発掘と教育→○ ・解説看板や総合案内板→○ ・組織体制の強化→△ ・国際対応→○ ・防災対策の強化→○ ・ネットワークへの貢献→△ 	<ul style="list-style-type: none"> ・浅間山ジオパーク推進協議会内の各専門委員会が、事務局員と連携し、自発的にジオパーク活動を推進している。 ・熔岩樹型の保全活動とその学術調査 ・webサイトや印刷物の自主的制作 ・台風19号時の災害復旧活動 ・将来ジオパークエリアの拡大を検討している南麓地域でも浅間山北麓ジオパークのPR活動が実施されたり、ガイドの交流が始まり住民主導で取り組んできた取り組みが、良い形でエリアに波及してきている。 ・拠点施設になりうるミュージアムも整備が進んでいる。 	<p>【優先順位順】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) マスタープラン・アクションプランの改定(設定したビジョンを達成するために、誰がいつまでに何をするか、を可視化・共有する) 2) 協議会の運営体制の強化(運営委員会の位置づけ、予算など) 3) ジオパーク活動に携わる人が、ユネスコ世界ジオパークの基準や理念を学び、ジオパークの動向の最新情報が得られるようにする。そしてその基準に基づいて、サイトの再設定等を行う。 4) JGNの中における存在感の向上。ネットワーク活動に参加し、他地域に自分たちの経験を提供し、他地域の経験を学ぶ。 5) 拠点施設間の連携強化。 6) ESD・防災教育の推進 7) 将来的には地球科学を専門とする専門員を雇用 8) 浅間石の保全 	○

ジオパーク名	概要	過去の審査の主な指摘事項(該当あれば)	今回の調査結果		今回の調査結果
			主な評価点	改善を求める点	
筑波山地域 2/5①	筑波山地域ジオパークではこの4年間で熱意を持ってジオパーク活動を推進する人や組織の活躍がめざましく、部会を中心にボトムアップ活動を進める基盤が形成されつつある。特に人の変化は大きく、研究者中心の「地質公園化しそうなジオパーク」からボトムアップの活動を推進する本来のジオパークへと転換できているようであった。ジオ議連の発足やユニバーサルデザインへの取り組み、地元事業者の認定商品開発などでは一定の成果が出ている。なお、前回の指摘に対しては、概ね解決されているものの、サイト見直しが完了しておらず、このことが事業の遅延につながっている。また教育連携はまだまだ不十分であり、教育・学術部会からの分離などを検討する必要がある。	1. ジオサイトデータベース・解説板・ガイドブックの整備→△ 2. ジオサイトにおける安全確保→○ 3. ガイド内容へのジオストーリーのさらなる浸透→○ 4. 地域振興部会、教育・学術部会における具体的な活動の進展→○ 5. ネットワーク活動のさらなる浸透→○ 6. ジオパークの「見える化」→△ 7. ジオパークと教育活動の連携→△ 8. ジオガイド養成プログラムおよびガイドシステムの確立→△ 9. ウェブサイトの整備→○ 10. 中核的な拠点施設、サテライト施設の整備→△ 11. ジオパークに関わる人材のさらなる待遇改善→△ 12. 広域的なジオパーク活動を支える協議会事務局体制の整備→△ 13. 茨城県との連携→○	1. 多様な人・組織のジオパーク参加:3部会の活動や認定ジオガイドの育成が進み、多様な人や組織が思いや熱意を持ってジオパーク活動へ参加するようになった。 2. ジオ議連の活躍:ジオパークと地方議会の関係についてはこれまでほとんど議論されていないことから、筑波山地域の取組は他地域の参考になるであろう。 3. ユニバーサルデザインの取り組み:産総研と協力した教材やツアーの開発など、ユニバーサルデザイン(UD)の考え方を取り入れた先進的な活動が展開されている。 4. ジオパークのブランド化:2018年に認定商品制度を開始し、3年で36品目が認定を受けた。地域の物語やテーマを反映した商品が認定され、品目も幅広く、同時に生産者の意欲も高い。	1. ジオサイトの再定義に伴うサイト見直しの完了 2. 学校教育との連携 3. コロナ禍におけるジオツーリズムのあり方の検討 4. 事務局運営体制の検討 5. 適正予算の検討 6. 拠点施設・学習施設の連携 7. 相互連携の推進およびパートナーシップの強化 8. 優良事例および地域課題のネットワーク発信や共有 9. 看板や展示に関するテクニカルな課題およびアドバイス	○